古代建築における鴟尾と大棟・降棟の納まり

はじめに　第一次大極殿復原のための基礎的研究の一つとして、古代建築の屋根瓦葺工法の検討を行っている。古代建築の棟を飾った鴟尾は、大棟・降棟の端部かつ交叉点に位置し、屋根妻廻りを納める重要な部位にある。ここでは、発掘出土鴟尾より想定できる屋根工法を考察する。

発掘出土鴟尾の検討　鴟尾を棟にのせる現存遺構としては、唐招提寺金堂・東大寺大仏殿・手向山神社宝庫など数例しかない。創建当初と推定される鴟尾をのせる唐招提寺金堂では、中世・近世の大きな修理、定期的な屋根葺き替えを経過するなかで、当初の屋根工法を維持しているかと言えば疑問が残る。東大寺・手向山例は後世修理の補加である。

また、『年中行事絵巻』等の絵画資料にも鴟尾を描くものがあるが、おおまかな描法であり、詳細な納まりまで推測しえない。

しかし鴟尾に関しては、発掘による出土例が全国に数多くある。完形に近い状態で出土したもの、あるいは断片より全体が復原されたものがあり、その細部にはデザインではなく、屋根での納まりを思慮した部分形状を見い出せるものがある。

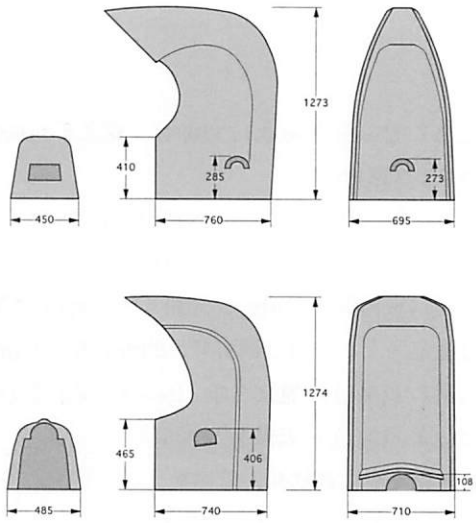

図1　四天王寺（上）・和田廃寺（下）出土鴟尾　（単位は㎜）

頭部に大棟の取付仕口をもつもの、側面に半円形の穿孔をもち、降棟天丸尻を納めると推定できるもの、腹部にけらばの拝掛巴尻手を差込む刳り形をもつもの。これらは鴟尾と大棟・降棟・けらばの接合部の雨仕舞を考慮したものとみられ、鴟尾本体と棟の納まりを推定できる。

表　検討対象鴟尾

発掘出土地	遺構所在地	制作年代	形状 降棟取付［上下関係］		形状 拝掛巴取付	
大阪府大阪市	四天王寺 旧講堂	7世紀後半	下	弧形の取付穴あり。頭部に対して3/4程の高さ。底部は水平	上	腹面底部より30cm程の高さに弧状の取付穴あり。降棟取付と同高
奈良県斑鳩町	法隆寺玉虫厨子	7世紀後半	下	取付穴はなし。隅棟取付は頭部高さに対して3/4程	上	鴟尾底部が上より二つ目の掛巴尻手に載るので、拝掛巴はかなり上方に納まる。
奈良県橿原市	和田廃寺	7世紀後半	上	半円形の降棟取付穴あり。大棟天丸瓦の取付と同高。取付穴下端は斜めに傾く	下	底部に半円形の刳り形。刳り形の上部に庇状の張り出しを設ける。
奈良県五條市	天神山瓦窯跡	7世紀後半	下	頭部高さに対して3/4程に取付穴。下端は水平	下	底部に半円形の刳り形
大阪府柏原市	高井田廃寺	7世紀後半	なし		下	底部に半円形の刳り形
大阪府羽曳野市	西琳寺（1994発掘出土）	7世紀後半	下	半円形の取付穴。取付穴底部をA形に整形。頭部高さに対し1/3程のかなり低い位置	下	底部に半円形の刳り形。上部に庇状の張り出しあり。
群馬県前橋市	山王廃寺（A、石造）	7世紀後半	極端に上	側面に平・丸瓦・降棟の突きつけ仕口あり。大棟端の反り上がりに対応しており、各仕口とも傾斜している。降棟天の高さは頭部高さに比べて1.5倍以上	上	下半を矩形にやや突出させ、その上方に掛平瓦を納める弧状の仕口あり。
群馬県前橋市	山王廃寺（B、石造）	7世紀後半	不明	側面に熨斗瓦を納める弧状のくぼみがある。右側面はかなり後方、左側面は中央に近い	不明	基底から約45cmの高さに弧状の仕口あり、掛平瓦を納めるものか。その下左右にも同様な仕口あり。
兵庫県福崎町	姥ヶ懐古墳	7世紀後半	上	取付穴の位置は、頭部より上方にある。	上	腹部上方（基底から頂部まで23.3cm）に位置する。
三重県嬉野町	辻垣内2号窯跡	7世紀後半	上	降棟取付穴、頭部高さとほぼ同じ。	下	底部に半円形の刳り形
兵庫県明石市	高丘3号窯跡	8世紀後半	下	弧形の取付穴あり。頭部に対して3/4程の高さ、底部は斜めに傾斜	下	底部に半円形の刳り形
奈良県奈良市	唐招提寺金堂大棟西端	宝亀年間（770-780）	なし	取付穴はなし。隅棟は鰭下部に納まる。	下	底部に半円形の刳り形（明治修理保存図面による）

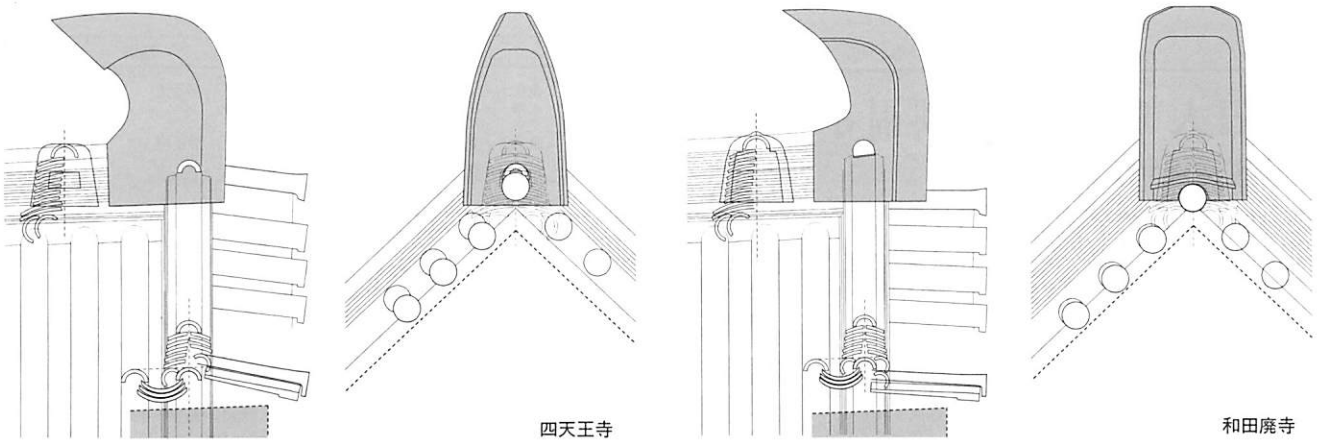

図2　鴟尾納まり推定図

側面・腹面の取付穴の位置関係を観察すると（表）、側面の降棟取付高さと腹部の拝掛巴取付位置により、次の2種類に分類できる。

(1) 拝掛巴が降棟とほぼ同じ高さに取付くもの

(2) 腹部下端の刳り形に取付くもの

(1) は四天王寺旧講堂・姥ヶ懐古墳例、(2) は和田廃寺・天神山瓦窯跡・高井田廃寺・西琳寺・高丘3号窯跡出土例が該当する。なお、工芸品ではあるが、法隆寺玉虫厨子は前者の納まりとなっている。

四天王寺・和田廃寺出土鴟尾　この中で四天王寺・和田廃寺出土鴟尾は出土状況が良く、棟取付穴の位置関係も誤差なく確認でき、それぞれ2種の典型的な例となる。両例は頭部幅・高、全高ともほぼ同じであることから（図1）、この2例のけらば廻り納まり推定図を作成比較し、詳細な検討をする。

作図の手順は、まず中心に鴟尾を描き、頭部幅・高さに合致する大棟を積む。棟際の勾配を矩に想定し、大棟下に合わせ平流れの丸・平瓦の高さを決める。鴟尾側面の取付穴に納まるように降棟天を決め、腹部の取付穴に留意しながらけらばを描き、降棟を調整する。以上により作成した納まり推定図が、図2である。

作図の結果、四天王寺出土鴟尾では次の納まりが推定できる。拝掛巴の取付高さが、腹部のかなり上にあり、降棟の拝み取付位置とほぼ同じである。そのため、平流れ丸・平瓦の高さと降棟天の差に比べ、降棟天とけらば瓦尻手の高さの差は少なくなり、けらば瓦は尻を降棟の下半分に差し込むように納めざるをえない。したがって、降棟は内外で積高が異なる。

和田廃寺鴟尾では、拝掛巴は腹部の下端を半円形に刳った位置に納まる。この高さから降る掛瓦の尻は、平流れの丸・平瓦とそれぞれほぼ同じ高さに納まるので、降棟の左右の積高は同じとなる。

両者の降棟棟積みより、けらばでの野地断面を想定したのが図3の模式図となる。

けらばの瓦を屋根に納める場合、解決しなければならないのは掛瓦の水勾配である。雨水は妻に向かい流れなければならないが、野地は破風に向け反り上がり、屋根面と逆勾配になる。法隆寺玉虫厨子では掛瓦まで反り上がるが、現実を無視した美術工芸品ゆえである。

四天王寺鴟尾では、平流れの平瓦下に何も置かずとも、掛瓦の尻を持上げているので、十分な勾配がとれる。しかし、和田廃寺例では、平瓦と掛瓦尻手がほぼ同じ高さになるので、土あるいは土居等で平部分を嵩上げをしなくては、掛瓦の水勾配がとれない。

まとめ　以上のように、四天王寺・和田廃寺出土鴟尾の比較により、野地部分までを含めた、2種の屋根葺き手法が考えられた。出土鴟尾の製作年代を考慮すれば、両手法は時代的に混在しており、どちらが古い手法であるか簡単には言えないが、四天王寺式が屋根の端で、段を作ってしまうのに対し、和田廃寺式ではなめらかな連続した屋根を形成できる。後者の方が発展した形式とも考えられる。

中世以降の瓦葺き工法として主流なのは、和田廃寺式からさらに発展した形式であるが、権現堂神殿（沖縄）や興福寺本堂（長崎）では、降棟の内外で棟積み段数を変える、四天王寺式と似た納まりを見ることができる。

（田中 泉／建造物研究室）

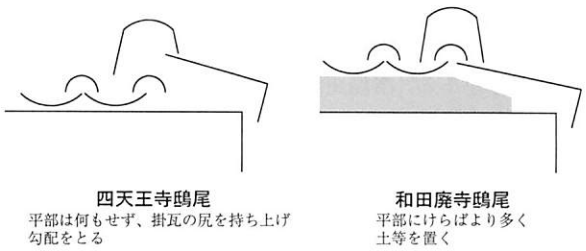

図3　けらば断面模式図